二

磐音は弾むような足取りで、筋違い御門から柳原土手を浅草御門に向かっていた。

赤鞘組を名乗る曽我部下総守俊道らが佐々木道場から姿を消した後、磐音は玲圓によばれて見所の前に罷り出でた。すると客人の一人がまだ驚きの表情を顔に残した。

「この御仁も佐々木先生の弟子にござるかな」

と訊いたものだ。

「西国のさる藩の家臣にございますが、今はちと事情があって藩から離れております。勤番の頃、みっちりとこの道場で修業を積んだ者でしてな。ただ今では、師匠の私も及びますまい」

「それは謙遜なれど……いやはや凄まじいものを見せてもろうたわ」

「速水様、機械がございましたらお引き合わせいたします。今日のところはこのままに」

頷いた相手が磐音に会釈をすると見所を立った。

速水という客が去った後、玲圓が、

「そなたの腕前を見るに道場稽古では飽きたらぬかもしれぬ。だがな、それとこれと違う。道場での稽古はおのれと向き合う鏡と思え。時に顔を出せ」

「通ってようございますか」

「そなたに限らず道場の門はいつも開いておるわ」

「はっ、はい」

師の言葉が磐音にはなにより嬉しかった。

磐音は郡代屋敷のそばを通りすぎて浅草御門の前に差し掛かろうとしていた。すると旅人宿が軒を連ねる馬喰町のほうに人が引き寄せられるように集まっていくのが見えた。

喧嘩などではないようだ。

磐音はなんとなく足を向けた。するとそれは、馬喰町四丁目の地本問屋大丸屋小兵衛の店先だと分かった。

日本橋界隈には通油町に鶴屋喜右衛門、村田屋治郎兵衛、松村屋弥兵衛、通塩町に奥村屋源六、横山町に岩戸屋喜三郎、そして馬喰町には西村屋与八、大丸屋小兵衛と、えど名だたる書物問屋が鎬を削って集まっていた。

男たちが今集まるのは大丸屋の店先だ。

（なにか評判の黄表紙でも売りだしたか）

磐音は足を、米沢町の角に店を構える今津屋へ向け直そうとした。

その耳にその言葉が聞こえてきた。

「見てみねえな。この貫禄、この姿、なんともたとえようがねえくらいにいい女だぜ。『雪模様二本堤白鶴乗込』の図か」

磐音が振り返れば、職人風の一人の手に刷り上がったばかりの浮世絵が握られていた。

ふらふらと歩み寄った。

「相済まぬ。それがしにもその浮世絵、見せてはくれまいか」

「買うには高いからねえ。ほれ、お侍さん、見てみねえ、白鷺か白鶴か、なんともいわれねえくらいの楚々とした太夫ぶりだぜ」

差し出した浮世絵は、正月八日、江戸市中を練り歩いた後、土手八丁で行列を整え直して進む奈緒の、いや白鶴の姿が、清楚にも描かれていた。

行きがちらちらと舞う土手八丁、白鶴の衣装も純白なら、差し掛けられた道中傘も白、白ずくめのその中で、白鶴の口紅と長柄傘の輪模様が真紅に刷かれ、それがピーンと絵を引き締めていた。

「お侍、吉原も知らない太夫にはすでに千両の値がついているんだ。ちょいっと高いが、せいぜい浮世絵を張り込むくらいしかおれっちにできることはねえ」

職人はそういうと大事そうに浮世絵を握り締めて去っていった。

白の幻影が、白鶴太夫の姿が消えたが、磐音の頭にははっきりと刻まれた。

「大丸屋で売りだした浮世絵じゃねえとよ。吉原五十間道の蔦屋重三郎が一切合切金をつぎ込んで勝負にッ出た浮世絵だと」

そんな声がしたが、磐音は脳裏から奈緒の幻影を振り払うようにして足を今津屋に向けた。

店の前には、外から戻ってきた様子のおこんが包みを抱えて立っていた。

「お久しぶりにございます、おこんさん」

「あら、どこかへお出かけ」

「三崎町の道場に参り、玲圓先生に無沙汰を詫びて参りました」

「馬喰町のかたから歩いてきたように思えたけど」

おこんは磐音が来るのを見ていたらしい。

「大丸屋に群がる人につられて、覗いていたんです」

頷いたおこんがなにかを言いかけたがやめた。

すでに白鶴の浮世絵が売りだされたことを知っている顔だ。

二人は並んで店に入った。

店内は相変わらずの混みようで、銭金そのものを扱うだけに緊張が張り詰めていた。だが、帳場格子の中には、老分の由蔵の姿が見えなかった。

「この時分は、台所で一服なさっているところよ」

と磐音を店の奥の台所に連れていった。だが、由蔵の姿はそこにもなかった。

「中橋広小路の伊勢屋の牡丹餅を買ってきたの。今、お茶にしますからね」

おこんは磐音を火鉢の前に座らせると勝手女中に指図をした。するとそこに、今津屋を仕切る老分が奥から現れた。手に帳簿を持っているところを見ると、主の吉右衛門に何事か、相談に行ったところだろうか。

「おお、来ておられたか」

磐音を見た由蔵は、ぺたりと腰を下ろした。

「近頃、お見限りでしたな」

「竹村さんがちと危難に遭っておりましたゆえ、そちらの始末に走り回っておりました」

「聞いた聞いた、聞きましたよ。世の中には竹村さんを拐かす変わり者がいると思ったが、不知火現伯の用心棒じゃあ、そんな目に遭っても仕方がないね」

「よくご存じですね」

不知火現伯の一件は内々に始末されたはずだがと磐音が首を傾げると、

「竹村さんがお見えになってお喋りしていかれましたよ」

と由蔵が種明かしして、

「ご当人は一向にめげておられませんな」

と苦笑いした。

竹村左衛門らしい行動だ。

「老分どの、関前藩のほうは話が進んでおりますか」

磐音が今津屋に立ち寄ったのはこのことが気になっていたからだ。

「中居様が時折りお見えになっては、経過を報告していかれます。坂崎様方が創案なされた再建策を軌道にのせるべく徐々に進んっでおりますよ」

「安心しました」

「まあ、関前藩の立て直しには、何年も歳月がかかりましょう。倦まず弛まず一歩一歩進むことです」

と言った由蔵が、

「あっ、そうそう、旦那様宛てに、坂崎正睦様から書状が届いております。さすがに磐音様のお父上じゃと、旦那様も行き届いた配慮に感心なさっておられましたよ」

正睦は藩再建の切り札として国家老に抜擢されたばかりだった。

「ですが、江戸家老に就任なされた福坂利高は、ちと世の中のご事情を掴んでおられぬようですな」

「…………」

「藩の陥った苦衷をどうやらまだ理解されていないようだ」

「迷惑をかけます」

「すでに外に出られた身の坂崎様が謝る要はございませんよ」

由蔵が言い切った。

おこんが茶と伊勢屋の牡丹餅を二人の前に差し出して、その話題は終わった。

磐音が両国橋を渡ったのは夕刻前のことだ。

おこんに夕餉を食していけと勧められた。だが、仕事もしていない身で馳走になるわけにもいかない。用事があるからとおこんに言い訳して、今津屋を後にしたのだ。だが、長屋に近づくにつれ、夕餉をどうしたものか、気になりだした。

米櫃に米は残っていた。問題は菜だ。

西広小路に入ると広場の片隅に筵を敷いて、百姓女が青物を売っていた。

小松菜だ。そのかたわらの竹籠には卵が盛られていた。

飯を炊いて生卵をかけて食べるか。

「生卵をかけて食べるか」

「生卵を五つと、そうだ、大根の古漬けを貰おう」

これで夕餉のおかずはできた。

磐音の足取りが急に早くなった。

長屋の木戸口で金兵衛が煙管をふかしながら、梅の木を眺めていた。何時の間にか花の季節も過ぎて、若葉に変わっていた。

「ただ今、今津屋にておこんどのに伊勢屋の牡丹餅を馳走になって参りました」

「おこんは親元に顔も見せないが元気かえ」

「壮健のご様子でした」

「壮健ねえ、親父は壮健じゃねえや」

金兵衛の目は、新しい住人の戸口を見た。どうやら新しい住人とおたねやおしまら古手の女たちとの間に挟まって苦労しているらしい。

「大家さんもなにかとご苦労らしい」

磐音は早々に長屋に戻ると、まずは米櫃からかまに米を三合ほど掬い入れた。

井戸端では、女たちが全員集まってなんとも賑やかだ。

「これはこれはお揃いじゃな」

「浪人さん、お兼は柳原の水茶屋の女だってよ。さっきさ、お化粧の匂いをぷんぷんさせて出ていったよ」

「仕事でござれば、化粧の一つも仕方あるまいな」

「なにいってんだい。ここは六間堀の裏長屋だよ、堅気の者しかいねえや」

「そうだそうだ。うちの孝太郎なんぞ、おっ母より美しくていい匂いがするだって、つきまとってやがる。がらが悪くなるよ」

磐音はおしまに怒鳴られて黙りこみ、井戸端の隅で米を洗った。

「早晩、騒ぎが起きるよ。そんときさ、大家ったら、どうする気だろうね」

「騒ぎの因があの女ならさ、おたねさん、おん出てもらうしかあるまいさ」

女たちの騒ぐ背景には若い女への嫉妬も込められているようだ。

磐音はこそこそと米を研ぐと、そおっと長屋に戻った。

騒ぎがおこったのはその夜のうちだ。

五つ半過ぎにお兼が駕籠で長屋に戻ってきた。

そのことを磐音は床の中で感じていた。だが、卵かけご飯で満腹した磐音は眠気に勝てずに眠りに落ちた。すると長屋の木戸口に男の声がして、お兼の戸を叩いた。

（たれぞ訪ねてきたか）

そんなことを半醒半睡の中で考えながら、再び眠りに落ちた。

夢の中か、酒を飲んで騒ぐ男の大声が続いていた。

それがふいに植木職人徳三の怒りの声に変わった。

磐音は慌てて夜具を跳ねた。

「やいかい、こちとらは朝の早い職人だ。酒をかっ食らって騒ぐのは、茶屋にしてくんな」

徳三は、金兵衛長屋の入り口、お兼の隣だ。

お兼の声がなにか言い訳をして詫びしているようだった。

「おおっ、どこの馬の骨か知ったことか。ともかくすぐに叩きだしな」

普段はおとなしい徳三が腹に据えかねたか、憤激の様子だ。すると別の男の声が割って入った。

「今、なんとぬかしやがった。どこの馬の骨とぬかしやがったな。おい、うちの浅草門前町を仕切っておられる、厩の三之助親分を虚仮にして、ただで住むと思うなよ」

「頬っぺたでも張られたような音がして、徳三が悲鳴を上げた」

「待て待て、乱暴をするんじゃない。私は大家の金兵衛です」

長屋じゅうが戸を細く開けて、様子を窺っていた。

「大家さん、おまえさんがこんな女を入れるから騒ぎが起きるんですよ」

徳三の女房のおいちが金兵衛に文句をつけていた。だが、金兵衛は若い遊び人に胸ぐらを摑まれて、返事をするどころではない。

「大家だからって、でけえ面をするんじゃねえ。毎晩、騒ごうってわけじゃねえや。引越祝いに一晩くらい飲み食いしたところで、どうということもあるめ」

若い男が金兵衛をぼろ雑巾のように放り出した。すると溝板の上に腰から落ちた金兵衛が、

「あ、痛たたたあ。なんてことをするんだ。年寄りに」

「だからよ。最初から黙ってすっこんでればいいんだよ」

男がお兼の長屋に姿を消そうとした。

「お待ちくだされ」

磐音が声をかけた。

振り返った男の片手が懐に隠されていた。

「なんだ、てめえは」

「長屋の住人でな」

「傘張り浪人か。怪我をしねえように小便でもして寝ちまいな」

「ご親切はまことにありがたいが、この金兵衛長屋は朝の早い住人ばかりでな。スマヌが宴会は打ち切りにしてくれぬか」

「物分かりの悪い連中だぜ」

長屋に入ろうとしていた男が振り返りざまに磐音にぶつかってきた。

懐手が抜かれ、合口が閃いて、磐音の顔をしゃくるように撫で斬ろうとした。

磐音は体を開くと合口を持った手首を下から掬い摑み、逆手に回すと、

えいっ

という気合いとともに擲った。

男の体は虚空で一回転すると背中から溝板に叩きつけられた。

外の争いの気配を察した仲間の子分が顔を出すと、

「親分！」

と異変を告げ知らせた。

磐音は木戸口へと身を引いていた。

お兼の長屋からのそりと浪人者が姿を見せ、異変を告げた子分ともう一人、さらにその後からぞろりとした長羽織を引っ掛けた小さな男が現れた。

「厩の三之助だが、どういうことだえ」

最後に出てきた男が貫禄を見せてあたりを睨め回した。てにした長脇差が異様に長く見える。

「お静かにとおねがいしているところじゃ。親分から言い聞かせてもらえぬかな」

「てめえ、うちの専太郎をこんな目に遭わせておきながら、静かにしろだと」

「弾みでな、仕方なかったのじゃ」

「ふざけやがって、甲村先生、音、秀、これじゃあ、示しがつかねえや。そいつを畳んで大川に放り込んじまいな」

親分の命に着流しの浪人用心棒、甲村剛蔵が柄に手をかけた。

「浪人さん、あいよ」

おたねが素手の磐音に心張り棒を渡した。

「すまぬな、借り受ける」

磐音は三尺ほどの長さの棍棒をてにすると木戸を出た。

そこはどんづまりの路地、幅一間あるかなしかの道だ。

続いて甲村と子分二人が木戸を出てきた。そして、その背後に厩の三之助が控えた。

甲村が大刀を抜き、右手一本にだらりと垂らすように保持した。

子分の一人の音は長脇差を振りかぶり、もう一人の秀は、合口を右の腰にぴたりと付けた。

なかなか喧嘩馴れした三人だ。

長屋の住人は付け木売りのおくまばば様まで争いの見物に回っていた。だが、騒ぎの因を作ったお兼の姿だけがなかった。

徳三が家から行灯を持ち出してきて、

「旦那、おれがついているぜ」

と言わねを鼓舞した。

「これは相済まぬな」

磐音が徳三に向かって律儀に頭を下げた。

その瞬間、長脇差の音の気配も見せずに突っ込んできた。

長脇差が閃き、磐音の肩口に叩きつけられようとした、その直後、磐音の体が、

すいっ

とその場で沈むと、飛び込んできた音の腰を心張り棒が叩いていた。

うっ

という叫びを洩らして梅の木の下に子分が転がり、動かなくなった。

「野郎！」

合口の男、秀が背を丸めて、磐音の懐に飛び込んできた。

剽悍な動きに磐音は、心張り棒を引き付け、次いで突き出していた。

ぐえっ

心張り棒の先が秀の鳩尾に入り、腰が砕けるようにへたり込んだ。

磐音の注意はすでに甲村の動きに移っていた。

右手一本にだらりと垂らして保持していた剣を、両手の脇構えに移すと、

「ええいっ！」

と踏み込んできた。

磐音は車輪に回される剣を心張り棒でふんわりと受けた。

（しめた）

と甲村は腹の底で思った。

鍔の嵌った剣と手首の防御もない棍棒が絡み合ったのだ。剣を立てて、ひた押しに押していけば、相手の手首を造作なく切り落とせる。

だが、次の瞬間、たてようとした剣の力が抜けて、弾かれていた。

（どうしたことか）

再び態勢を立て直した甲村剛蔵は、八双に剣を構え直した。

磐音は中段に心張り棒をつけていた。

「おのれ」

用心棒は、相手を倒してなんぼの稼業だ。

甲村剛蔵は、一撃に集中すると走った。

磐音も踏み込んだ。

二人は梅の木の下でぶつかった。

八双の剣が磐音の肩口を、磐音の棍棒が甲村の脇腹を叩いたのが、金兵衛らには同時に思えた。

「坂崎さん」

鈍い打撃音が響いて、ぶつかり合った二人のうち前方へ走り抜けたのは磐音だけだった。

甲村剛蔵が棒立ちに竦み、凍りついたよう固まった。そして、てから剣が落ち、体が、

ぐらり

と揺れて梅の木のしたに、すでに倒れていた子分の体と重なるように突っ伏していった。

わああっ

という歓声が金兵衛長屋に上った。

「厩の三之助親分、どうなさるな」

磐音の声がのどかに問うた。

三之助は度肝を抜かれたか、呆然と立っていた。

「なあに気を失っただけだ。ｓれがしが手当をいたすで、なかよく川を渡って浅草にお戻りなされ」

磐音は、心張り棒をおたねに戻すと甲村に喝を入れて回り、次々に意識を回復させた。

金兵衛長屋から厩一家が風のように去り、金兵衛が、

「坂崎さんに造作をかけたな」

「なんのこれしき」

「大家さん、おまえさんが茶屋女を引き入れるからこんな騒ぎになるんだよ。追い出してくんな」

と頬っぺたを張り飛ばされた徳三が金兵衛に文句をつけた。するとおくまばば様が徳三の袖を引っ張り、井戸端を顎で指した。

全員の視線が井戸端にいった。するとそこではお兼が何事もなかったように汚れた器をせっせと洗っていた。

「なんて女だい」

おたねが吐き捨てた。

お兼の口からなんと端唄の文句が流れてきた。